野溝七生子文学の研究

菊地　優美

本研究は、野溝七生子（一八九七―一九八七）の文学を分析対象として、いまだ研究の端緒にあるその文学的特質を明らかにしようとするものである。

野溝七生子は、家父長制下の「家」の論理の中に身を置き、その家父長制抑圧の最たる例とも言うべき父の暴力や、女性抑圧を受ける母への思慕の中で、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる規範への抗いを試みる〈娘〉たちの物語を多く創作した。本研究は、そのような野溝文学における〈娘〉たちのジェンダーやセクシュアリティをめぐる規範への抗いがいかに表象されるかを分析・検討し、その批評性を明らかにすることを目的とした。それにあたり、モチーフの継承を特質の一つとする野溝文学の作品の系譜性をも把握するため、主要なモチーフから娘から母への思慕、父の暴力、そして〈読む〉／〈書く〉娘の表象に注目した。加えて、野溝文学の特徴の一つであるインターテクストの引用についても、先の〈読む〉／〈書く〉娘との関わりを視野に入れながら、〈娘〉たちの規範への抗いがいかに表象されるかを論じる上で注目した。そして、そこに潜在する野溝文学の問題性についても指摘し、野溝文学の再評価と同時に、限界も含めたその実像を描き出すことを目指した。

「第一部　父と母との狭間にある〈娘〉」では、野溝文学の起点である『山梔』と、その後の「灰色の扉―Doppelgängerin―」、「奈良の幻」、「黄昏の花―Sancta Susanna―」の三作を取り上げ、『山梔』が示した「家」の娘が内面化する規範と母への批判性の欠如、そして父の暴力の背後にある「家」と男性性といった問題への批評性が、その後の作品に内包されていることを論じた。『山梔』では、阿字子が「家」の娘として内面化した「家」の論理や規範により母や自身への批判性を見失う様が描かれ、〈母〉への批評的視座の必要性が提起されていることを論じた。また父の暴力の背後にある「家」を担う者としての男性性の問題が示されていることを指摘した。「灰色の扉」においては、語り手のヌマが抱く母への寄り添いと批判という両義的な感情が描かれていることを考察した。また、ヌマの手紙では、彼女が自身の内面化した女性性とそれへの抗いの意志との間で葛藤し、なおかつ自身に内在する家父長制規範と女性規範によりその葛藤の言語化が阻まれている苦悩が、ドッペルゲンガーの表象に仮託されていることを論じた。「奈良の幻」では、男性の語り手である「私」の手紙が、「家」を担う者としての男性性喪失からの回復を目指すために書かれ、ホモソーシャルな絆への欲望を内包していると読解した。それと同時に、クノが「私」から向けられる〈母〉への欲望による女性抑圧に抗い、その抗いがインターテクストにより広く国境を越えた女性たちのための抗いとしての解釈に開かれていると読み解いた。「黄昏の花」では、語り手の「私」によるインターテクストや象徴的なモチーフを用いた暗示的な手紙の語りにより、父の暴力に潜在する性的欲望を告発した上で、父の暴力による娘のセクシュアリティへの抑圧に対する抗いが試みられていると読み解いた。さらに、その手紙の末尾で引用されるインターテクストの台詞により、「私」の手紙、ひいては「黄昏の花」というテクストが物語外部の女性読者たちとの間に女性抑圧に対する抵抗の共同体を立ち上げる可能性に開かれていると解釈した。

「第二部　〈母〉への思慕から女性同士の共感の物語へ」では、『女獣心理』と「沙子死す」の二作を取り上げ、第一部で取り上げた野溝作品が提起した課題がその後の作品でどのような到達を見せたかを論じた。『女獣心理』では、物語が男性の語り手・塁による手記の形式をとることに注目し、「家」を

担う者としての男性性の喪失の経験を持つ彼の手記が、征矢を媒介としたホモソーシャルな絆を通じた男性性回復の目論見によるものであることを明らかにした。そして、本作がそのような男性間の絆が内包する征矢への女性抑圧に対する批評性を懐胎する物語であることを考察した。それにより、同作を野溝文学における父の暴力の淵源にある「家」における男性性への批評性が最も先鋭化された作として定位した。その上で、さらに『女獣心理』を沙子や征矢といった女性登場人物の言葉に注目して読み直し、彼女たちの言葉が塁の特権的な手記の語りに亀裂を入れ、その信頼性を剥奪していることを明らかにした。それを通じて、『女獣心理』とは手記を通じた塁の女性抑圧的な目論見が、女性たちの生み出すノイズにより挫折させられる物語であると結論づけた。そして、同作のなかに『山梔』における阿字子を起点とした〈母〉への批判性を獲得できない〈娘〉へのアンチテーゼと、〈母〉への寄り添いと批判性を両立しながら、「家」の規範の外に女性間の親密な絆を求める新しい〈娘〉の表象を見出した。「沙子死す」では、沙子を妊娠や出産を自らの闘志の下に行うことで、家父長制的な抑圧に抵抗し、自らの主体化を試みる女性と捉え、彼女の既存の〈母〉のイメージへの拒否と、産む身体としての自己イメージを構想する自由を確保しようとする姿を読み解いた。それと同時に、同作はインターテクストを介した女性たちの共感の可能性と、差異と分断を描き出していることを読み取った。同作は、野溝作品のなかに伏在してきた〈母〉とは何かという問いへの応答を示すとともに、野溝文学の問題性をも潜在させる物語として読解することができた。

以上のように、本研究では、野溝七生子の文学において、『山梔』で提示された「家」の娘が内面化する規範と〈母〉への批判性、そして父の暴力の背後にある「家」と男性性の問題が、各作品において変奏され、展開していることを明らかにした。野溝文学は女性が〈読み〉、〈書く〉ことに女性抑圧への抗いの可能性を託していたが、そこには〈読み〉、〈書く〉ための知識やリテラシーの差異による女性同士の分断の可能性という問題性がはらまれていることをも指摘した。